

第 183 回山口西田読書会（2018 年 9 月 29 日）
第 182 回（同年 9 月 22 日）の Protocol

I. テキスト要約

「物理現象の背後にあるもの」（大正 13（1925）年 1 月）を最初から読み始める。51 頁後ろから 4 行目まで読了。

1. 「近接作用の物理学」

遠隔作用の物理学は「物が直に他のものに働く」と考えるのに対し、近接作用の物理学は空間を「力の場」と考える。ここで「空間に物理的性質を与えるものは何か」という問いをめぐり、物理現象が感覚的性質の変化に還元される。

2. 「实在認識の根柢としての意志の自覚」

感覚内容の識別、例えば赤と青を区別するには色一般がなければならない。色の概念は自己の中に無限なる発展を蔵している理念である。音も同様である。これらの感覚作用を統一するのが思惟である。その対象界は数の世界である。しかしそれは可能の世界であって、实在の世界ではない。思惟は感覚内容と結合して始めて経験界が構成される。思惟から見れば此の経験界は偶然的な世界となる。例えば燐が 44 度で溶けるというのは思惟にとっては偶然である。44 度でなければならない必然はない。こうして思惟内容が一般であるのに対し、経験内容は特殊であると言える。特殊なる経験内容が一般的なる思惟内容を抑制することによって客観的経験界が成立するのである。ところでそれを成立せしめるためには特殊が一般を含むアプリアリがなければならないことになるが、これが我々の意志である。かくして「経験界は意志のアプリアリによって成立する」ことになるのである。

II. 議論要約

哲学的な空間概念について、エレア派からデモクリトスの原子論の成立の説明があった。色や音が無限なる発展を蔵していることについて、我々がこうした色や音を感じることの不思議が芸術家の創作活動を通じて改めて確認された。また数学が可能の世界、物理学が实在の世界を扱うものであることが指摘された。経験界の偶然について西田は積極的な評価をしているが、ヘーゲルはそれを自然の限界と見て、「自然の無力」と言っていることが紹介された。意志が一般を特殊の中に含むことについて、意志は何か（A）を意志するが、それは A でないものを意志しなかったということを含んでいる、その意味で一般を含んでいる、という説明があった。今日読書会に来るということは他の可能性を排除してここに来ているのだから、ここに来ているということは一般を含んでいるのである。ただ燐が 44 度で溶けるという特殊や重力加速度が我々の意志であるというのは異様である、という感想を残して、本日のテキストの講読を終えた。なお休憩時間に、岡部さんから文字のフォント、印刷の仕事に関する興味深い話が聞けたことを書き添えて置く。

（佐野記）